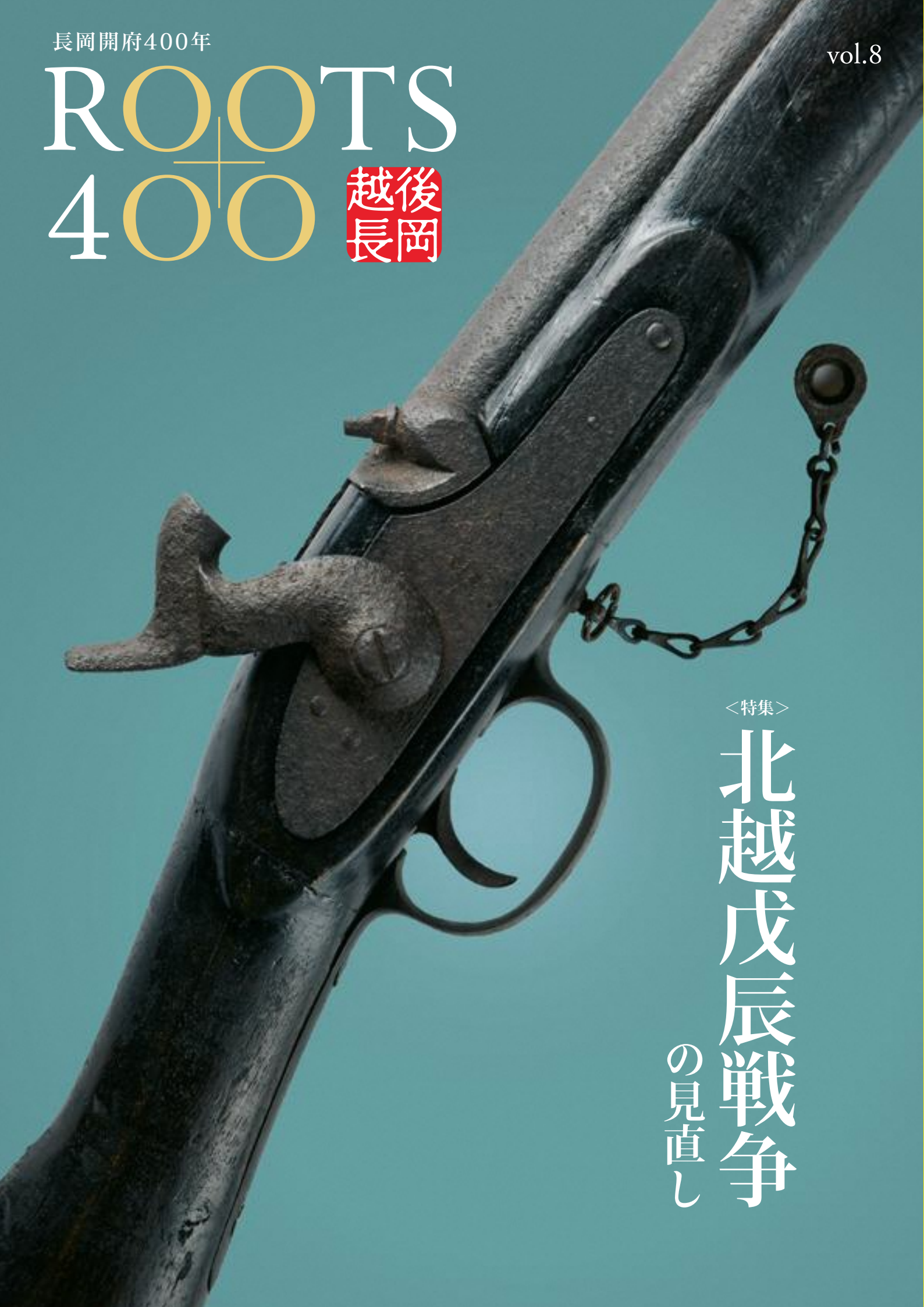
長岡開府400年

ROOTS 400

越後長岡

vol.8



＜特集＞

北越戊辰戦争の見直し

北越戊辰戦争をふりかえれば何がみえる

巻頭言

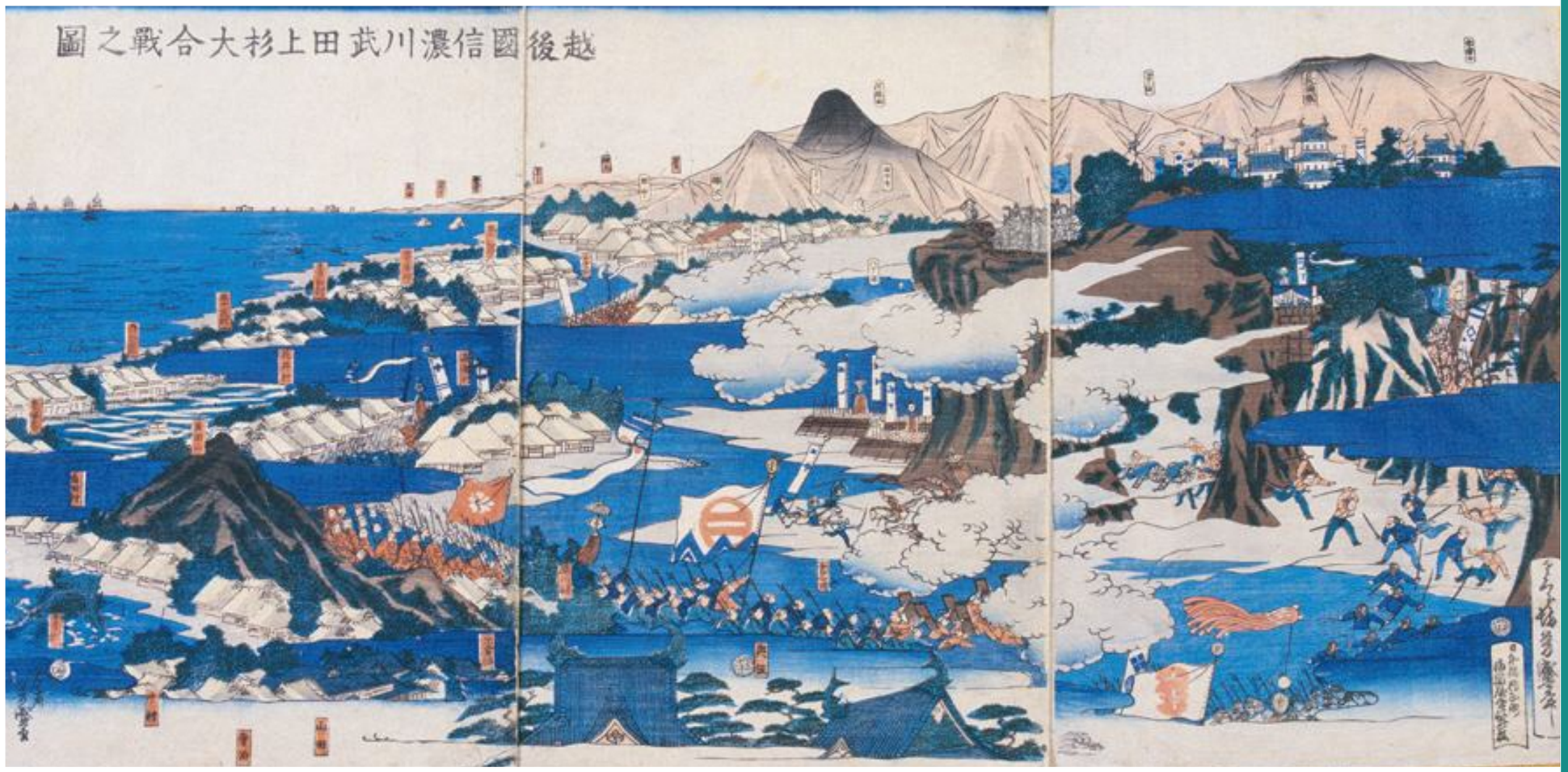
北越戊辰戦争は開府二百五十年を経た
長岡藩にとって大きな時代の
境目にあたっていました。
それまで培ってきた長岡藩の美徳が
戦争によって粉砕されたばかりではなく
いままでの長岡藩の価値観が
問い直されることになりました。
すなわち、封建領主牧野家の家風である
常在戦場の精神や正義の定義が
大きく揺らぐことになります。
長岡藩は領内の武士は勿論
農民・商人を含めて実利を尊び
合理思考による改革をすすめ
政治的にも独立の気風を貫こうとしていました。
産業は独自に開花し、信濃川通船によって
交易を行うシステムが確立しつつありました。
それが戦争で一気に崩れてしまう。
しかしその境目を体験した当時の民衆は
みずからの伝統の力を信じて復興に尽力しました。
戦争があったからこそ
士魂商才の大同団結がはかられた
という見方もあるくらいです。
廃墟のなかから、当時資金力もなく
既存の技術もない長岡が、人びとの創造力によって
すなわち今にいうイノベーションによって
復興を為しとげたといえましょう。
そのことを、長岡開府四百年の
記念の年に誇らしく追懐し
当時の市民力の高さを評価したいと思います。

長岡開府四百年記念事業実行委員会
会長　磯田 達伸

ROOTS 400 越後長岡

発刊趣旨

英語の ROOTS（ルーツ）は、樹木の根や物事の始まりを意味します。
また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、
開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



越後国信濃川武田上杉大合戦之図
明治時代に作成された木版錦絵。北越戊辰戦争の長岡城攻防戦を描いたものだが、官賊の時世をはばかり、戦国時代の上杉家・武田家の信濃川を挟んだ戦争図にしているところが面白い。三枚続、さくら坊芳盛画、明治元年。

表紙・エンフィールド銃
（口径14.6mm 銃身長1,246mm）
イギリスのエンフィールド造兵廠で開発された先込め式施条銃。幕末に大量に輸入され新政府軍の主力兵器となった。有効射程距離は900mに及ぶ。長岡藩ではすでに慶応2年(1866)第二次長州征伐の際には所持していた。弾丸の形状からミニエー銃に分類される。長岡市北越戊辰戦争伝承館に展示。

長岡落城を機に戦争は越後全体に広がった

北越戊辰戦争は慶応四年（一八六八）に
勃発した日本の内乱のうち
越後（新潟県内佐渡を除く）で
起こった戦争をいう。
とりわけ長岡城攻防戦が著名であるが
現在の長岡市域のほとんどが戦場となった。
おもな戦場をあげれば
榎峠・朝日山戦（旧長岡市南部）
中島上陸戦（長岡城の落城）
杉沢・赤坂峠の戦い、中之島・今町戦争
大黒・福井・十二潟・筒場（つつば）・福島の戦い
寺泊海戦、島崎の戦い、森立峠（もりたて）の戦い
半蔵金（はんぞうがね）の戦い、熊袋（くまぶくろ）・小栗山の戦い
与板の戦い、長岡城奪還戦
長岡城再落城など
小規模な戦闘を含めれば戦いは約百日間で
六十回を超える戦闘が繰り返された。
攻める新政府軍（西軍）にも戦闘による
犠牲者は九百五十七名。
守る同盟軍（東軍）にも千二百五十七名を超える
犠牲者を出した戦いであった。
民間人にも犠牲者が出てその数百名を
くだらないという激戦だった。
ころは旧暦五月（七月）から始まって
七月末まで、折からの洪水が戦場を

襲ったので泥との戦いでもあった。
始め刀槍を用いての戦法も
銃器、大砲が主力となり
新政府軍は信州諸藩、富山
加賀、芸州などと西南諸藩の連合軍を
編成して、約三万名を動員して
越後を襲撃した。
守る越後の同盟軍にも会津、米沢、桑名
上山（かみのやま）などの奥羽越列藩同盟軍八千名が
加勢して、長岡藩兵を応援した。
ただし、与板藩だけは勤皇を貫き
新政府軍に協力している。
このため、越後の民家は焼かれ
流れ弾（だま）にあたって死傷する民衆が多くでた。
戦場は村上城の北から頸城の川浦まで
広範囲だった。新政府軍が費やした戦費は
九十万両といわれている。
長岡藩にも恭順に応ずる者は
少なからずいたが、ほぼ全藩士一団となって
薩摩・長州連合軍を迎え撃った。
戦争は同盟軍の敗退で終わり
会津若松城攻略戦へ移っていったが
長岡藩総督河井継之助（つぎのすけ）は
会津へむかう八十里越で
「八十里、腰抜け武士の越す峠」の
自嘲した句を詠んだ。

小千谷談判の真相

戊辰戦争の勃発

鳥羽・伏見で旧幕府軍（東軍・同盟軍ともいう）と新政府軍（西軍）が衝突して以来、戦争の予兆は日本全国に拡がっていった。越後は当時、十一藩と会津・桑名・沼津・高崎・上山藩などの分領と旧幕府領が点在し、その動揺が広がっていった。

各藩内には、いずれも主戦派、非戦派、勤皇、佐幕の各説を主張し、領内の治安確保につとめる動きが顕著になっていた。

そんななか、越後長岡藩（七万四千余石）は、軍事総督河井継之助を擁して武装独立の道を歩もうとする。それは長岡藩が立藩以来、常在戦場の精神で磨いてきた歴史に基づいている。

慶応四年（一八六八）四月十三日の安禅寺御用留によれば、諸国の隠密が長岡城下に入り込み、長岡藩の動静をうかがっていることが記されている。長岡藩も藩士に銃器を配り、四月十七日には藩士一同総登城して「今般、姦臣天子をはさんで幕府をおとし入れ、御譜代の諸侯、往々幕に背て、薩長に通ず。大に怪むに堪へたり、余、小藩といえども孤城に拠↖りて、国中に独立し、存亡、唯、天に任せ、以て、三百年来の主恩に酬え、且、義藩の嚆矢たらんと欲す」と佐幕的態度を明らかにした。

そんななか、会津藩征伐を企む新政府軍が長岡藩境に迫った。そこで、軍事総督河井継之助は単身、軍営に乗り込んで、戦争回避を図った。ここに小千谷談判が、小千谷町（現小千谷市平成）真言宗寺院慈眼寺で開かれる。

ときは慶応四年五月二日。新暦でいえば六月二十一日午後二時頃、梅雨が蕭条と降る日に東山道先鋒総督府軍軍監岩村精一郎、薩摩藩外城隊長淵辺直右衛門、長州藩奇兵隊長杉山壮一郎と白井小助が長岡藩軍事総督河井継之助と談判に及んだ。

談判の決裂が戦争をより拡大させた。

談判の冒頭は、継之助が長岡藩恭順をあきらかにし、討幕の理由を問い一書を差し出すところから始まった。のっけから大胆に「会津藩や旧幕府軍を追討するといいながら、本当は私的な制裁や権力奪取なんだろう」というわけである。

それに対し、岩村は反論し、征討の目的を言った。「参謀（岩村）一々其趣意を述ぶ、したがって述べれば、したがって弁解、件々あえて服せず」と激論になった。

その模様は岩村らが怒ることになり、「我、ただ勅を奉じて長岡を伐つ、いまだ汝と論を為すの命を受けず、汝、強て弁論を欲せば、明日陣頭兵馬の間において、その是非を決せん」といい、憤然と席をたった。河井はあわてて岩村の裾をとらえて「いまだ、事情は述べておりません。いましばらく話し合いましょう」ととりすがったが、岩村はそれを払って退席した。

岩村にしてみれば、東山道先鋒総督府軍軍監として、会津征討を進める立場にあった。長岡藩の立場など、何も考慮しなくとも良い。

しかし、河井は違った。大政奉還後の日本をどうするか。会津藩をどう救済して、戊辰戦争をどう終息させるかが課題だった。

小千谷町人の介在もあって、ようやく実現した談判の場を成功させようと意気込んで乗り込んできた。

しかし、河井の思惑はすべて水泡に帰し、より激越な北越戊辰戦争が始まることになった。

朝日山大合戦の図　慶応4年5月11日の朝日山戦の様子を錦絵にしたもの。長州藩参謀時山直八が戦死。山根辰蔵・山県狂介（図中では山振辰三・山県敬輔）が活躍している様が描かれている。旧幕府歩兵がくみふせられているが、実際は長岡藩側の有利な戦闘。三枚続 芳滝画 明治元年 浅井コレクション所蔵。

岩村精一郎（のちの高俊 1845〜1906）
国立国会図書館所蔵

長岡藩本陣（長岡市摂田屋・光福寺）

小千谷市・慈眼寺談判場

山県狂介（のちの有朋 1838〜1922）
長崎大学附属図書館所蔵

山県有朋（狂介）の
「仇守とりでのかがり
かげふけて
夏も身にしむ越の山風」
和歌軸装

八丁沖古戦場パーク（長岡市富島町）

なぜ、河井継之助は開戦に踏み切ったのか

越後大戦の図
北越戊辰戦争前後、瓦版のような型式で戦争の模様が庶民に伝えられた。記事は長岡近郊の大黒村付近の戦闘と寺泊・久田の戦い。越後高田藩士岡島但馬の口述。早稲田大学図書館所蔵。

長岡藩軍事総督河井継之助は「最後のサムライ」とたとえられるが、決して古いしきたりや刀槍にこだわりを持っていたサムライだったわけではない。

日頃から「武士の家を弓馬の家というが、今後は改めて砲艦の家と言った方がよかろう」と語り、射的が好きで鉄砲は上手かった。その河井の実力は、鉄砲で三十間（約五十四メートル）の距離にある五寸（十五センチ）の的に命中させるほどの腕前だったという。

当時の西洋兵法や最新の兵器にも精通していた河井は、長岡藩の兵制改革に力を注いだ。当時の最新兵器ガトリング砲を二門購入し、西洋砲術を取り入れ多くの大砲を揃えたのも、少数の兵力で如何に犠牲者を少なく大軍を相手に戦うかという戦略の一つであり、抑止力的な備えとしての武装だった。長岡藩の藩是「常在戦場」常に備えよ、という精神が垣間見える。

長岡藩が軍備を整えていたことは両軍にとって脅威であり魅力であったに違いない。

だからといって、長岡藩の実力を試そうと開戦に踏み切ったわけではない。あくまでも、小千谷談判決裂後に悩んだ結果が開戦だった。談判の翌日（五月三日）、継之助は、長岡藩領前島村を警備している親友の川島億次郎（のちの三島億二郎）をたずねている。そこで、「己れの首と三万両を新政府軍側にとどければ、当面の戦争は回避できる」と述べたという。川島は、一人、君を死なせるわけにはいかないと同情し、開戦に同意した。戦後、岩村精一郎は小千谷談判を悔やんだと伝えられる。小千谷談判は、北越戊辰戦争の重大な、過ちを後世に伝えるものとなった。

小千谷談判に同行した二見虎三郎

幕末長岡藩の銃器

兵力で圧倒的優位にあった新政府軍が、なぜ北越戊辰戦争の長岡城攻防戦で苦戦を強いられたのか。

一八三〇年代西洋兵制を導入した江戸幕府や各藩が相次いで外国からゲベール銃を購入した。ゲベール銃の弾丸は施条のない銃身から回転をしないで発射されるので命中率は低く射程距離も短い。長岡藩はいちはやく、この欠点を見抜き、銃身内で回転しながら発射できるミニエー銃を採用している。

ミニエー銃の命中率は格段に高く、射程距離もゲベール銃の三倍以上であった。幕末になると新政府軍の多くがこの銃を買い求めている。

慶応二年（一八六六）に撮影された長岡藩兵の写真では、藩士の手にミニエー銃（エンフィールド銃）が握られている。

群馬県の猿ヶ京に残る関所の記録によれば万延元年（一八六〇）から慶応三年（一八六七）にかけて長岡藩は様々な新式銃を頻繁に仕入れている。戦争が始まると長岡藩はカービン銃を百丁購入した。騎馬隊用のカービン銃は銃身が短く日本人に適していた。

他に当時日本に三門しか無かったガトリング砲を、河井継之助は二門を六千両で購入した。長岡藩のような小藩が少ない兵力で大軍に挑むにはこれしかないと考えての投資であった。また大砲の充実にも力を注ぎフランス式軍制を敷き大小三十一門の大砲を揃えている。小型で山道も運びやすい四斤山砲を最前線に置き、訓練により命中精度を高め射程距離も伸ばした。四斤山砲は長岡藩兵の先陣にあって北越戊辰戦争を戦い抜く原動力となっていた。

長岡藩士松井策之進と兵士(慶応2年撮影)

ガトリング砲模型（長岡市・河井継之助記念館）

四斤山砲模型（長岡市北越戊辰戦争伝承館）

長岡藩軍事総督 河井継之助の人間性

西郷隆盛も恐れた男

奥羽越列藩同盟軍のなかで、長岡藩軍務総督（軍事総督）の河井継之助が、一際光彩を放つのは、優れた洞察力に基づいた戦略眼を持っていたことだろう。ナポレオンの戦法を知り、近代兵備を整えた少勢の長岡藩兵が、河井の指揮のもと、数々の戦勝をあげる。陽動作戦を実施した六月二・三日の今町戦。八丁沖を渡って、長岡城を奪還した夜襲戦などは、北越戊辰戦争を後世で、著名にした。その戦術も確かなものがあり、新政府軍の野望をくじく才があった。まさに新政府軍の作戦指導の頂点にいた薩摩藩の西郷隆盛と同年の文政十年生まれ。ともに陽明学を独習し、地方独立の近代国家構想の夢があった。

小山正太郎筆河井継之助肖像画（『河井継之助傳』より）

台閣に立つべき一代の傑物

戦後、継之助の死を惜しむ声は敵味方問わず多く聞かれた。

西郷隆盛は「不幸にも賊名を負って斃れたが、もしも今日世にあるならば台閣（内閣）に立つべきものを。たしかに一代の傑物であった」と評し、人を褒めないことで知られる勝海舟も「彼はなかなかの人物であったが、惜しいことをした」と語っている。

明治二十二年（一八八九）憲法発布に伴う恩赦により賊名を解かれると、継之助の遺徳を偲ぶ碑の建立が計画された。その中心は三島億二郎、三間正弘、小松彰らで、場所には長岡城のシンボル御三階櫓の跡地が選ばれている。

題字の揮毫は、北越戊辰戦争にも参戦した薩摩出身の黒田清隆。撰文は方谷門下の三島中洲に依頼した。

「大きい頭、角ばった顔、眉は清秀で目は大きくその爛々たる様は雷のようであった。怒って人を見据えるときは仰視できないほど威厳を持ち、鋭敏で明快な判断力を備えていた」。中洲は、実際に親交のあった継之助の功績について人柄も加えて詳細に紹介している。

長く賊軍の軍事総督という汚名を着せられていた継之助の姿は、当時漢学の第一人者である中洲の名文により、あらためて後世に伝えられた。

河井継之助の碑（現在は悠久山公園に移設されている）

奥羽越列藩同盟と加茂軍議

小千谷談判決裂の後、五月九日に長岡城中で、会津・長岡・桑名・旧幕府脱走の衝鋒隊の諸将による軍議が開かれた。長岡藩軍事総督河井継之助はあくまで戦守（敵が攻撃したら迎え撃つ）の姿勢にこだわったが、会津藩佐川官兵衛らは、新政府軍は講和は考えていないとし、先制攻撃を主張した。談判決裂によって交渉の道を断たれた河井継之助は、ついに戦闘を決断し、藩境に配置している長岡藩兵を二手に分けて、榎峠へ向かわせた。三国街道上をすすむ萩原要人隊と迂回した川島（のちの三島）億次郎隊が会津・桑名両藩兵の協力を得て、榎峠上の新政府軍の上田・松代藩兵と、五月十日に交戦に入った。ここに長岡城攻防戦が開始された。

戦いは榎峠の戦いから、薩摩・長州藩兵の応援を得た新政府軍側の攻勢となり、戦場は朝日山に移った。

朝日山戦では長州藩の時山直八が戦死するなどの激戦となって、攻防は膠着状況となった。

これを打開しようと、長州藩の三好軍太郎らが、当時、洪水で激流となった信濃川を、五月十九日、大島村付近から強行渡河して、長岡城の奇襲をかけた。主力を朝日山方面に派出させていた長岡藩は、落城の悲劇に見舞われた。藩主一行は悠久山・森立峠と八十里越をして、会津にのがれた。

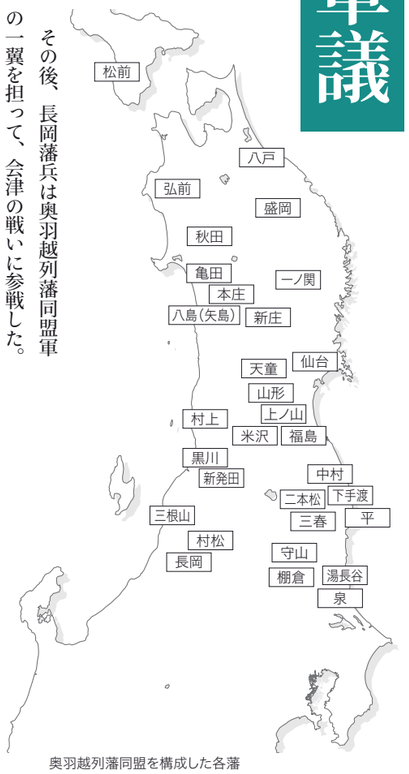
軍事総督河井継之助は残兵を加茂（加茂市）に集結させて、長岡城の奪還をめざすことになる。

当時、奥羽列藩同盟が奥州白石城下で結盟されていたが、どのように会津・庄内藩を救済するかは曖昧であった。ただ、仙台藩士による新政府軍参謀世良修蔵の襲撃があって、新政府軍との全面戦争の気配が濃厚だった。

五月二十二日、加茂において、米沢・会津・桑名・長岡・上山・村上・村松の各藩の代表者による加茂軍議が開かれる。この席上、河井継之助は奥羽・越後諸藩の結束を説き、長岡城の奪還を画策し、より苛烈な戦いを指導する。

今町・与板、赤坂峠、島崎などを戦い抜き、大黒・福井など長岡ののちの新組地区等で一か月半の泥沼の戦を経たのち、七月二十五日、八丁沖を強行渡河して、長岡城を奪還した。しかし、この戦いで河井継之助は負傷し、俄かに長岡藩勢の士気が衰え、七月二十九日に再び長岡城は新政府軍によって落城している。

その後、長岡藩兵は奥羽越列藩同盟軍の一翼を担って、会津の戦いに参戦した。河井継之助は八月十六日、会津藩領、只見塩沢で陣没した。



奥羽越列藩同盟を構成した各藩

戊辰戦争双六　有がたき御代の寿 一枚 国員画 明治元年
戊辰戦争の経過を中心に双六ふうにしめしている。婦志水（伏見）大合戦、長岡落城、越後筑摩川（信濃川）の戦などが描かれている。西尾市岩瀬文庫所蔵。

北越戊辰戦争の惨禍

激戦地となった村々

北越戊辰戦争の最激戦地ともされる新組地区。その郷土誌には、惨禍の語り伝えが生々しく記されている。

地区内の各村での戦闘は、長岡城奪還の攻防において、慶応四年六月四日から六日の間に両軍が布陣して後、再落城の追撃戦があった七月二十九日まで、おおよそ二ヶ月続いた。

攻防が続く間、女性と子どもは山中まで避難したが、家を守るために残った男たちは軍夫として徴集され、すると隣村同士が余儀なく敵対する形になった。目前で斬り合いを見た者もおり、不運にも戦闘に居合わせたために銃弾で太腿を撃ち抜かれた女性もいる。結果、地域からは十四名の死傷者を出した。同盟軍による焦土作戦は家屋にも甚大な被害を出し、地域内の五村の焼失数は合計百七十一軒に及ぶ。

ときに農民は、戦禍から村を守るための逞しさも見せる。近村で随一の大庄屋安藤林泉は中立的な立場を取り、両軍の間を立ち回る。林泉は長岡藩に多額の資金を供与しており、河井継之助とも親交した傑物だった。

戊辰の戦蹟記念碑

全戸が焼失する惨禍に遭った大黒村（現大黒町、北越戊辰戦争伝承館が立地する）では、残された遺体を両軍の区別なく埋葬した。遺体の側に散らばっていた小銭を基金に、供養塔が建てられると、以後百五十年経った今でも毎年の慰霊祭が行われている。

大黒町の戊辰戦蹟記念碑
当時海軍中将だった山本五十六が揮毫した記念碑。同盟軍兵士の勇戦を讃えている。山本五十六はまた、「大黒戦を憶う」として次の漢詩を残している。
君仕忠勤三百年　勇猛至誠鉄石心
鋸嶽山頂名月夜　誰語維新大黒戦

君に仕え忠勤すること三百年　勇猛の至誠は鉄石の心
鋸（きょ）嶽（がく）山頂（鋸山）名月の夜　誰か語らん維新大黒の戦（いくさ）

未来につなぐ鎮魂

いわゆる北越戊辰戦争という戦いは、三国峠・雪峠（小千谷市）、小出島（魚沼市）、鯨波（柏崎市）、椎谷（柏崎市）などで始まっていた。本格的な戦闘となったのは、榎峠、朝日山戦からである。薩摩・長州藩を基幹とする新政府軍は高田、信州松代、加賀、富山などの各藩兵とともに越後全体に全面戦争を仕掛けている。奥羽越列藩同盟軍は長岡・会津・米沢・桑名藩兵を基幹として旧幕府脱走兵・水戸脱走兵などの応援を得て激戦をした。戦闘は灰爪（柏崎市）、杉沢、小栗山（見附市）、森立峠（長岡市）、久田（出雲崎町）、土ケ谷（長岡市栃尾）、大口（長岡市中之島）、福島（長岡市）、半蔵金、荷頃（長岡市栃尾）、長岡城下、十日町（長岡市）、遠くは新潟、三条、加茂、村松、中条等に及びその戦禍は民衆を苦しめた。

戦争は日本近代化をすすめる新政府の封建制の旧弊を打破する戦いだと評価されているむきもあるが、越後の民衆にとって何の恩恵もなかった。長岡藩は戦後復興されたとはいえ、戦争の惨禍は残り、長く朝敵の汚名を着せられ、人びとは苦しんだ。

戦後、長岡は戊辰戦争を偲び、五十年祭等の犠牲者の慰霊祭を開催している。戦争当時の苦境を偲び、向後、決して再び、あやまちを犯すことはしないと市民一同、戦争のない世界をめざしている。

開府四百年の平成三十年は、戊辰戦争百五十年の記念の年でもある。

水島爾保布筆　長岡藩の壮士

長岡市民になったお殿様 No.8

牧野家第十七代当主 牧野忠昌氏 寄稿

牧野家の歴史

三代藩主忠辰公は寛文五年（一六六五）に生まれ十歳で家督を継いだ。十七歳で上越高田城請け取りの任務を果たした。五代将軍徳川綱吉公に論語の講義をし、御前で度々お能を舞っている。国元では新田開発や松や杉などの植林を奨励し、三官山（悠久山）にも杉苗千本を植えさせたという。「十分盃」をもとに「満つれば欠く」と言う処世訓を示した。敬神家で弥彦神社を庇護し、蒼柴神社の御祭神でもある。享保七年（一七二二）五十八歳で没した。

祖父忠篤が作らせた十分盃
箱書には我が祖忠辰朝臣訓戒のため製しむる。とある。京都香山作。

四代忠寿公は近江膳所藩主本多康慶公の三男で元禄八年（一六九五）生まれ。京都の公家から正室厚姫（廣幡豊忠従一位内大臣の妹）を迎えている。桜田門勤番や奏者番を務め、享保二十年（一七三五）四十一歳で没した。

現代に生きる牧野ファミリー

十年前会津若松で「戊辰戦争奥羽越列藩同盟結成百四十周年記念シンポジウム」が盛大に開催された。一部では徳川御宗家十八代徳川恒孝様などの講演があった。二部のテーマは「我が藩欺く戦えり」で、パネリストは会津松平家当主のご長男、桑名松平家十七代ご当主、仙台伊達家十八代ご当主、庄内酒井家十八代ご当主、米沢上杉家十六代ご当主と私であった。菅家会津若松市長を交えて各当主は熱のこもった話をされた。

私は長岡藩が奥羽越列藩の義の同盟に参加したこと、河井継之助の小千谷会談、藩風の義の精神、長岡城攻防戦、ガトリング砲や新式銃の装備、長岡城奪還、長岡藩兵は最後まで抵抗したこと等を話した。会場は東軍参戦の関係者で超満員となり大変な熱気であった。

北越戊辰戦争伝承館

北越戊辰戦争を焦点にした施設

全国的に見ても有数の激戦地であった新組地区。なかでも、夜闇に紛れて「八町潟（八丁沖）」と呼ばれた広大な沼地を渡った、長岡城奪還の奇襲作戦は歴史に名高い。その古戦場に臨む集落のなかに北越戊辰戦争伝承館はある。

二階バルコニーから展望するのは、東西の兵が陣と砲台を置き、二ヶ月にも渡る激しい攻防を繰り返した古戦場。今や美田に姿を変えたその景観が、見る者に深く感慨を与える。北越戊辰戦争伝承館の展示の多くは、地域に伝わる戦争の資料や逸話である。そこからは、望まずして戦場となった農村の悲痛がまざまざと感じられる。過去の戦争を語り伝える目的は、未来の平和を考えるためでもある。

城下町の河井継之助記念館は、いわば武士から見た歴史。北越戊辰戦争伝承館は農民から見た歴史。両館をあわせて観ることで、より理解を深めることができるだろう。

長谷川泰翁像
北越戊辰戦争では長岡の軍医だった長谷川泰。医学者としての功績を称えて、伝承館の隣に像が建立された。

ジオラマ
八町潟（八丁沖）を中心にして長岡の地形を再現したジオラマ。各地で起きた戦闘が臨場感のある音声で解説される。

地域の先人を伝え残す

新組地区は名高い先人たちのゆかりの地でもある。農業用水路「福島江」を建設し、田畑を潤した桑原久右衛門、歌集「蓮の露」を編み、良寛との交流を後世に伝えた貞心尼、医療から文明開化に至るまで幅広い分野に貢献した長谷川泰。それらの資料を地域住民が主体となって用意し、新たな企画を練って展示する。

かつて戦争に苦しんだ村は今、自らの歴史を後世に伝え遺す誇りに満ちている。

長岡市北越戊辰戦争伝承館
開館時間／AM10:00～PM4:00
休館日／月・金曜日（祝日の場合翌日）、12月1日から3月31日まで
所在地／長岡市大黒町39番地2
電話／0258-21-2688

長岡開府四百年記念事業

次の百年へ 新しい米百俵

記念試合では新潟アルビレックスBBの選手が牧野家の家紋「三つ柏」入り特別デザインユニフォームを着用。強豪シーホース三河に今シーズン初勝利をおさめました。（1月28日）

長岡開府四百年は新たなスタート

いよいよ長岡開府から四百年の節目の年を迎えました。百年に一度の「未来を切り開く、人づくり・まちづくりの新たなスタート」を一緒に盛り上げていきましょう。

記念式典は五月二十七日に開催します。開府四百年にふさわしい式典に併せて、著名人による講演会や、長岡の歴史・文化・芸能などのイベントをアオーレ長岡で行います。大手通りでは、「越後長岡五十六まつり」も同日開催の予定。一体となって開府四百年を祝います。

一月・四月には、新潟アルビレックスBBと連携し、長岡藩主牧野家のルーツの地、愛知県のチームと「長岡開府四百年記念試合」を開催。プロスポーツを通じて若い世代にPRしていきます。

市民参加の事業や記念グッズ販売など、長岡開府四百年を盛り上げる事業も年間を通じて続々と実施。長岡の文化や伝統、精神性を見つめ直し、ふるさとに愛着を高めることができる一年にしていきます。

ゆかりの地とのさらなる交流発展へ

歴史的につながりのある福島県会津若松市と愛知県豊川市の市長が長岡市を訪れました。

「平成三十年は戊辰戦争百五十周年、長岡開府四百年の節目の年。これを機にさらに都市間交流を深めていきたい」と会津若松市の室井市長が語ると、磯田市長は「四百年は未来を見据えた重要な年。三大学一高専によるイノベーション関係で会津大学との連携など、さらなる交流に向け戊辰のつながりを活かしていきたい」と応えました。

また、豊川市の山脇市長と磯田市長との話では、これまでの「うなごうじ祭り」などの交流をはじめ、観光面を含めた連携について、意見を交換しました。

今後、ゆかりの地とのさらなる交流・連携を深めていきます。

平成30年を迎えた消防出初式で、若鳶会の皆さんが長岡開府400年をお祝いしてくれました。（1月7日）

記念式典で披露する書道パフォーマンスの打合せをする市内高校書道部のみなさん

磯田市長と意見を交わす豊川市の山脇実市長（平成29年12月21日アオーレ長岡）

（左から）会津若松市の目黒正三郎議長、室井照平市長、長岡市の磯田市長、牧野忠昌さん、丸山勝総議長（平成29年11月20日アオーレ長岡）

長岡開府400年記念事業へのご寄附をお願いします

長岡開府４００年記念事業実行委員会では、100年先を見据えた「まちづくり、ひとづくり」を応援するため、未来投資募金を募集しています。長岡が誇る米百俵の精神を次代に継承するとともに、「新しい米百俵」と呼べる教育、人材育成にむけた取り組みをすすめてまいります。
この事業の趣旨にご理解をいただき、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

●ご寄附のお申し込み・お問い合わせは事務局
長岡市政策企画課 開府400年記念事業推進室
TEL.0258-39-2395へお願いします。

口座名義：長岡開府400年記念事業実行委員会
金融機関：北越銀行長岡市役所支店
口座番号：２０２７２６２

開府四百年のあゆみ No.8

いまから一〇一年前 北越戊辰戦争の慰霊祭が行われた

戊辰戦役五十年祭場（坂之上校）（右）
式典には来賓のほか阪之上小学校の児童などをあわせて2,000人も祭壇に拝礼をした。

慰霊祭は神式と仏式で営まれた。宗派ごとに追悼法要の時間を設けられ読経の声が響いた。（下左右）

戊辰戦役五十年慰霊祭

大正六年（一九一七年）五月十九日に阪之上尋常小学校を会場にして戊辰戦役五十年慰霊祭がとり行われた。この日はまさに五十年前、長岡城が落城した日。翌日に長岡開府三百年祭を控え、旧藩関係者が数多く長岡に集まった。参列者は旧長岡藩主牧野家の十五代当主牧野忠篤、河井継之助の甥の根岸錬次郎や河島良温長岡市長などおよそ一五〇〇人が故人を偲んだ。

その前年の大正五年（一九一六年）六月十八日には、長岡での慰霊祭に帰郷できない在京者のため牧野家菩提所である済海寺にて戊辰殉難者五十回忌法要が営まれていた。参列者はおよそ一八〇人。いずれの式典にも戦没者の名を残すべく、参列者に冊子が配布された。これらの冊子は今も図書館で読むことができる。

舊長岡藩 戊辰戦難忠死録
済海寺にて戊辰殉難者五十回忌法要の際に配布された。戦死者の氏名と長岡城下図を綴った小冊子。

舊長岡藩戊辰殉難者五十回忌法会録
済海寺での五十回忌法要の概要をまとめ、参列者の名簿と戦死者との続柄が書かれている。藩士代表稲垣林四郎の弔辞には戦死者を偲びながらも、賊名を受けた憤りが込められている。

戊辰戦争始末全
長岡藩戊辰戦死者五十年祭の際に藩士遺族や従軍者、式典の出席者に配布された。慶応3年11月25日に第12代藩主牧野忠訓が河井継之助らと江戸藩邸を出発し、上京する場面から始まる。

千也（かずや）がゆく！

KAZUYA REPORTS

長岡藩 ゆかりの地を巡る探訪記

第8回

八十里越編

八十里越・古道入口
ここが河井継之助が傷を負いながらも越えてきた峠道である。浅草岳登道でもあり、世界遺産級のブナ林がある。

奥会津只見、豊かな自然と長岡との繋がりのある歴史に見て感じ取る

長岡から二時間、山々を越え田子倉湖を眺めた先に奥会津只見がある。向かうには六十里越と言う長岡～只見の最短ルートがあるが、昔は八十里越と言う三条～只見ルートがあった。実際には八里程しか無いが歩く人達が谷あり沢ありの難所で険しき道と言い八十里越という名称になったらしい。その八十里越には長岡藩と只見の絆の物語がある。

只見町と言えば河井継之助記念館や継之助の墓、そしてユネスコエコパークにも登録された国内最大級のブナ林がある。今回は八十里越チャレンジで叶津番所から歩きたいと思う。

しかし生憎（あいにく）の雨!?そこで只見と言えばこの方、只見町ブナセンター長の新国（にくに）勇氏登場で町を案内してもらった。

只見町に入ると至る所に立札が立ってある。その一つに丹羽族（にわぞく）ゆかりの場所がある。丹羽は長岡落城後に八十里越を越えてくる数千人の長岡藩士やその家族達の食料の確保に努めたが、農民達にその余力はなく困難をきわめた。責任をとって丹羽は自刃するが、その忠義に心を打たれた農民たちは種籾まで差し出したそうだ。

どんな気持ちで種籾を差し出し、どんな気持ちでそれを頂いたのだろうか。その只見町の方々の優しさと、丹羽の正義感、この絆を長岡の人々は知らなければいけない。

米百俵の精神は長岡で受け継がれているが、この長岡人の命を救った尊い米がなければ今の長岡もないのではなかろうか…

只見町内に立つ戊辰戦争の標柱
この立て札を目印に観光すると只見町の観光が面白くなること間違いなし。

牧野忠訓公と姫君が使用した布団
只見町の旧家に今も大切に保存されている。150年という年月を感じさせないほど綺麗な状態だ。

旧長谷部家住宅（叶津番所）
八十里越え入口の関所跡。おばあちゃんの家を思い出すような暖かみのある作りだ。

河井継之助の墓
長岡城落城後会津に向かう途中傷の悪化で死去。終焉の地として只見にある。

執筆：石丸 千也（いしまる かずや）
長岡で美容室を経営し、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。

長岡藩の兵糧に固パンあり

紅屋重正の『大手饅頭』

紅屋重正　長岡市表町1-10-35
TEL.0258-32-1456

「紅屋重正」は一八〇五年（文化二年）創業、長岡藩御用達の老舗和菓子店である。こちらの看板商品『大手饅頭』は、お酒が仄かに香る皮に小豆と黒糖のこし餡を包み、ふっくらと蒸し上げた酒饅頭。長岡市民のソウルフードだ。一八六〇年頃、長岡藩十代藩主・牧野忠雅の依頼をきっかけに、京都の『虎屋饅頭』の製法を学んだ二代目小出庄松が藩主納得の酒饅頭を完成させた。店が長岡城の大手門前だったので『大手饅頭』と名付けられ、その製法は今も昔も変わらない。

一八六六年、十一代藩主・忠恭が第二次長州征伐で大坂出陣の際、紅屋は兵糧として、蒸したもち米を干して粗めにひいた『道明寺粉』三十斤を献上。さらに、二年後の戊辰戦争では兵糧方を命じられ、大手饅頭の材料である小麦粉で「固パン」を作って納入したという。

パンは鉄砲と共に種子島のポルトガル船からの伝来品。長岡藩には戊辰戦争時、ガトリング砲だけでなくパンも存在していたのである。

開府四百年のお土産

百年に一度の記念に

藩主牧野家による開府から四百年、戊辰戦争から百五十年の節目を同時に迎え、観光客を歓迎するムードが急上昇する長岡市。そこで、歴史にちなんだお土産を見てみる。

長岡駅前の大手通沿い、市の複合施設シティホールプラザアオーレ長岡の隣に「まちなか観光プラザ」がある。観光スポットから宿泊、交通まで、総合的な観光案内を提供する施設だ。そこでは、地場産業を活かした特徴的な商品が販売されている。なかでもこのメモリアルイヤーに長岡を訪ねる歴史ファンにお薦めなのは、牧野家の御紋が入った商品だ。藩主ゆかりの蔵の地酒、十七代当主の筆による藩是「常在戦場」のトートバッグなどが新しく登場した。

まちなか観光プラザ　長岡市大手通1-4-11
TEL.0258-31-5202

卓上カレンダーには、長岡城のシンボル「御三階」の櫓がデザインされた。定番の手ぬぐいでは、「米百俵」のプリントが贈り物としても人気。そして何と言っても、幕末の藩家老河井継之助は外せない。

旅の思い出の品として、さらには百年単位の歴史イベントの記念として、長岡の歴史にちなんだ逸品の登場にご注目いただきたい。

ROOTS 400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう

平成30年は長岡開府400年

越後長岡ROOTS400 第8号　北越戊辰戦争の見直し

次号予告／牧野忠精のルネサンス

発行／長岡開府400年記念事業実行委員会　平成30年3月10日
平成30年5月20日　第2刷
編集／越後長岡ROOTS400編集会議　代表 稲川明雄
石丸千也、恩田富太、星貴、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10（開府400年記念事業推進室内）
Tel.0258-39-2395　Fax.0258-39-2272
E-mail：kaifu400@city.nagaoka.lg.jp
制作／株式会社ネオス
協力／北越戊辰戦争伝承館運営協議会、光福寺、慈眼寺、関川忠義、新国勇
長岡市立科学博物館、長岡市立中央図書館
長岡市立中央図書館文書資料室

©